

君の椅子

人は、自分の居場所を捜して旅をしているようなものです。

自分の居場所とは、家族や職場、趣味のグループ等々どのような場であれ、人と人との関わりの中で、自分は確かに存在していると認識できるような場所をいうのだと思います。

勿論、仙人のように、人知れず一人で生きている人がいないわけではありませんが、そのような生き方を自らの意志で選択できる人は、ただならぬ人です。

しかし普通の人には、自分の存在が誰にも知られず、認識もされないような場所を、ねぐらにはしても居場所にするのではないのでしょうか。

つい先日、千葉県柏市で、2歳の長男に十分な食事を与えずに餓死させたとして、両親が逮捕されるという事件が発生しました。亡くなった子にとって、居場所であるべき場所が居場所ではなかったということであり、胸が締め付けられる思いがします。同時に、家族だからといって、自動的にそこが居場所になるわけではないことを、改めて認識させられます。

こうした中、新しい生命のスタートを地域が支え、その誕生に「ありがとう」をいえる社会を作り、限りある生命の営みを未来にバトンタッチしていくための「君の椅子」プロジェクトが静かに、しかし、確かな広がりを見せていることに注目したいと思います。

居場所の象徴でもある「椅子」を、地域が子どもに贈る。これは、地域に住む多くの人々が、「君」という新しい命の誕生を心から喜び、その健やかな成長を願っているということ、を、「未来の君」に伝えるメッセージです。

子ども達に贈られた椅子は、子どもの成長と共に同じ時を共有する事になります。子ども達にとってその椅子は「自分の椅子」であり、その温もりを通して、何時でも、何時までも古里と繋がることのできるのです。

この「君の椅子」プロジェクトは、2006年から、北海道文化財団の理事長で旭川大学大学院の客員教授をされている磯田憲一氏のゼミで発案されたも

のです。以来、上川管内の東川町、剣淵町、愛別町で実施され、この5年間で350人を超える子ども達に椅子が贈られています。

椅子は、毎年、新たなデザインにより制作されており、しかも、一脚ごとにシリアルナンバーが振ってありますので、文字通り世界に一つしかない「自分の椅子」になっています。そして、このプロジェクトは、今や地域の枠を超え、個人で参加される方が全国に広がりつつあります。

「君の椅子」は、親と子を繋ぐ絆です。

「君の椅子」は、我が子を愛おしむ親の思いが形となって現れたというだけではありません。その子が幾つになっても、どんな時でも、自分の居場所は間違いなく、その椅子と繋がった先にあることを教えてくれるはずです。

(塾頭 吉田 洋一)